

自立的政治闘争団体と政党政治（Ⅰ）

—青年ドイツ騎士団と〈真正国民行動〉—

岩 崎 好 成

Independent Political Combat Leagues and Party
Politics in the Weimar Republic(Ⅰ)

Takashige IWASAKI

(Received September 10, 1992)

はじめに

ナチズム運動ないしワイマル共和国政治運動の史的把握に際しては、考察の対象を狭くナチ党々組織ないし政党政治運動に限定することは慎しまねばならないだろう。周知の如く、ナチズム運動の主たる構成要素には党組織と並んで突撃隊Sturmabteilung=SAがあり、後者を抜きにして運動の興隆は語り難い。また、このSAと類似の行動形態や組織構造・外観を有した、例えば鉄兜団Stahlhelmや青年ドイツ騎士団Jungdeutscher Orden等の諸団体が議会外の政治的大衆組織として諸政党と競合していた、との事実もある。これらいわゆる「政治闘争団体Politische Kampfbünde」の動向を右翼政治の中に正当に位置づけ比較考察の対象とした時初めて、SAを擁したナチズム運動の特質・個性も明瞭となるのではなかろうか。

このような観点から、筆者は先に、SA、騎士団、鉄兜団、更には共和国擁護派の国旗団Reichsbanner、共産党系の赤色前線兵士同盟Roter Frontkämpferbundを含めた政治闘争団体の定義化を図ってみた。¹⁾ 諸団体は以下の四点においてほぼ共通する。すなわち、政治闘争団体とは、

- ① それなりの成員数を有した、したがって大衆運動が可能な、
- ② (政党政治運動を排斥するにせよ補完するにせよ) 院外活動に力点を置く非政党的非議会主義的政治組織であり、
- ③ (その名が示すように) 武断的姿勢、更には暴力行使への親和性を色濃く反映させた行動形態をとる一方、
- ④ その組織構造・外観においては、きわめて軍隊的な性格を保持していた集団であった。

無論、諸団体個々に四項目それぞれが該当する程度には差があり、例えば③については騎士団は抑制的であった。一方、諸団体は以上の如き共通像をもちつつも、そのイデオロギーの立場を互いに異にし、②冒頭に示した如く、政党との距離についても違いがあった。後者について言えば、SAはナチ党に付属・結合する政治闘争団体つまり政党軍Parteiarmeeであったのに対し、鉄兜団および騎士団は、政党制の原理的否定の下、政党から自立し政党と競合する自立的政治闘争団体であった。したがって鉄兜団や騎士団は、ワイマル議会制の展開の中、政党に依存しない自前の政治思想・政策をもって、議会主義とは異なる方途で政治変革を希求しなければならなかった。

この自立的政治闘争団体の政治思想・理念については、筆者は、騎士団々長マーラウンA. Mahraunの1927年の著『青年ドイツ宣言Das Jungdeutsche Manifest』をもとにまとめたことがあ

る。²⁾

マーラウンが主敵とするのは、“ポリシェヴィズム”と“金権主義”であるが、とくに後者が“政党（至上）主義”とともに当面の打倒対象となる。彼に言わせれば、政党とは集票マシンにすぎず「その集票数はアジテーション装置の大きさに依存」し、その装置を形成するのは資金である。したがって「政党制の真の主人は資金所有者」つまり金権勢力である、ということになる。更に“実利主義”、すなわち己れの幸福のみを考えて物質的富の蓄積に価値を見出だすが如き世界観が跋扈しているから金権勢力がはびこるのだ、とされ、既成政党は個々の利害政治の追求者でしかない、と批判される。そこで、実利主義に対するに全体の利益を優先する“理想主義”的世界観が主張されるのだが、マーラウンによれば、この理想主義的世界観のひとつの表われが“英雄主義”であり、その下に「利己的憤激」「激情に駆り立てられた欲望」の表出としての憎悪・狂信を捨て、自己抑制するよう強く要請される。ちなみにナチズム運動はこれができず、政治闘争に憎悪と狂信を持ち込み、「その狂信が野蛮な煽動的反セム主義を培養した」とされ、ナチ党＝政党という観点からも攻撃される。このような批判のちマーラウンは、*Staatsbürgerliche Gemeinschaft*とか*Volksstaat*との用語を用いて、以上の如き問題状況を一掃するには“公民”化された国民からなる“共同体”国家を作ればよい、と主張する。これは一般に民族共同体思想と言われたものの範疇に属し、階級対立なき全体利益優先の社会建設をめざすものであり、公民というのは、単なる市民ではなくして私欲を捨て全体的立場を自覚して国家への共同責任を果たす者、ほどの意味である。そして、その公民および共同体概念の史の実例こそ第一次大戦時の“前線兵士”とその“前線僚友関係”であり、前線兵士の塹壕における同志的結合関係に国家・社会建設の際のモデルないし理想型を見るのである。最後に彼は、この前線兵士を糾合し、規律ある、私欲を捨てた同志的結合を継続的に保持している集団が、ブントすなわち自立的政治闘争団体であり、騎士団であると主張する。

問題は、あるいは以上の主張に欠けているのは、「公民的共同体」であれ「人民国家」であれ、それを形成すれば現在の問題状況は一掃されるというが、それをどのように形成するのか、どのような道筋でそこにたどりつくのか、という点である。ミニ「公民的共同体」としての騎士団を見よ、騎士団に学べ、と言うだけでは政党批判たりえても自己満足の域を出ず、現状変革には何ら結びつかない。政党制を否定し自らの代表を議会に送らない、という自立的政治闘争団体は、いかにして政治権力を獲得・行使するのか。換言すれば、『青年ドイツ宣言』で述べられたことは政治理念にすぎず、その理念をどう実践政治に結びつけていくのか、が騎士団には未解決ということになる。騎士団ないしその将来構想に首肯する者が権力を手中にしない限り、「公民的共同体」は現実のものにはならないだろう。

そこで騎士団は、29年から30年にかけて、当時の政治展開に大きく規定されつつも、この実践政治の必要を充足すべく、真正国民行動*Volksnationale Aktion*=*VN - Aktion*という結集運動を唱導し、それを真正国民全国連合*Volksnationale Reichsvereinigung*=*VNR*に組織化することになる。注目すべきことに、このVNRには政党機能が付与され、その後、VNRのザクセン邦議会選挙への参加、更にはドイツ民主党との合併によるドイツ国家党結成、という事態が招来する。果して騎士団の実践政治は、自ら拠って立つ反議会主義の原理を捨て去ることでしか結実しなかったのであろうか。それともそこには、理念と現実政治を統一するマーラウンなりの論理が貫徹されていたのであろうか。また、ナチズム運動に政党としてのナチ党と政治闘争団体としてのSAの結合を見る場合、騎士団のVNRおよび国家党との関係はどのように対比されるのであろうか。

本稿は、直接には騎士団の実践政治上の展開を跡づけ、自立的政治闘争団体の権力獲得にむけての模索の様相を明らかにすることを目的とする。その際のひとつの手掛かりとして、『青年ド

「ドイツ宣言」以後のマーラウンの思想内容を重視したいと考えるが、これは、騎士団という軍隊の権威主義的組織の下では、頂点に立つ指導者の思想が政治実践の基礎となるからであり、同時に、その反共的、反金権的、反ナチ的立場からする批判的現状認識に注目するからである。その上で、VNRの新党結成という側面と結集運動化という側面に示される、あるいは、諸政党と併存する騎士団や鉄兜団の存在そのものとVNR・民主党の合併という事態に示される、右翼政治の分裂と統合の問題について若干の検討を加えてみたい。その際、ナチズム運動の興隆要因を政治勢力の分裂を克服するその統合運動性に求める立場からすれば、統合の組織的局面すなわち政党・政治闘争団体ファクターの統一という点において、上述した如く、騎士団の政党政治への介入は十分比較考察の対象になりうると思われる。³⁾

1 騎士団と〈真正国民行動〉

(1) 反ヤング案国民投票運動への対抗

本章では、VN-AktionならびにVNRすなわち真正国民行動、真正国民全国連合とは一体いかなるものであり、なぜそこに向かうのか、まずは騎士団々長マーラウンの語るところに徹底して耳を傾けてみたい。

その際、マーラウンあるいは騎士団に要請される課題として、次の三点に留意する必要がある。

- ① 自立的政治闘争団体としての自立性の確保（ないし自負の充足およびイニシアティブの獲得）
- ② （『青年ドイツ宣言』で言明した、とくに反ボルシェヴィズム、反金権主義、反政党主義等の）理念に忠実な実践政治の展開
- ③ 共和国の政治状況に対応した実践政治の展開

この三点の同時解決がかなりの難題であることは容易に想像できるが、しかし現実の事態は、この三点を複合する形で騎士団に向かってくるのである。それがドイツ国家人民党・鉄兜団・ナチ党の三者連合による、いわゆる反ヤング案国民投票運動であった。

この運動は、後述するように、本来、自立的政治闘争団体鉄兜団が28年の夏以降、議会外の政治変革手段たる国民請願・票決制度を利用して憲法改正を図ろうとしたものであった。そこに両政党が加わり、結局、28年10月に国家人民党々首となったフーゲンベルク A. Hugenbergの主導の下、ドイツに戦争責任はなく、したがってそれに基づく賠償義務はない、と主張する「ドイツ民族の奴隷化に反対する法律」制定を求める運動になったものである。29年12月になされた票決は、賛成580万票13.8%のみで有権者の過半数の参加がなく敗北に終る。

騎士団からすれば、この運動は、①にいう自立的政治闘争団体ならではの模索が鉄兜団に先取りされてしまったことを意味し、かつ映画・新聞・出版コンツェルンの盟主たるフーゲンベルクが主導したことは②にいう反金権主義という理念に逆らう事態の進展であった。更に、失敗したとはいえ、三者が「国民的抵抗派」を称して結集し自らをナショナリズムの唯一の担い手として喧伝したことは、国民主義運動の本流を自負する騎士団をいたく刺激し、③でいう対応が強く要請されることになったのである。

以下、29年初頭に開始されるVN-Aktionの触媒となったこの国民投票運動に関わるマーラウンの言辞を若干紹介してみよう。VN-AktionおよびVNRの目的と意味を説明するために29年末に出版されたマーラウンの著『旅立ちDer Aufbruch』冒頭の記事は、

「フーゲンベルク・グループの『解法』すなわち国民請願・票決をめぐる闘争は、ドイツ国民にそれなりの善事をもたらした。すなわち、ドイツ国民の眞の解放闘争が段階を新たにしたということである。」

と逆説的に述べ⁴⁾、VN - Aktionを論じた章では、

「要するに1929年のVN - Aktionは、新しい国民主義運動の形成、新しい政治フロントの形成は決して（フーゲンベルク等）過激派集団の独占事業ではない、ということを証明したのであった。」

とした。⁵⁾ また、29年11月2日に発せられたVNRの結成アピールも次のような文章に始まる。⁶⁾

「国民投票行動は激情を解き放った。その指導層は公然と、彼らがこの行動全体を国民主義運動の総点呼としてのみ見做していたことを認めている。この企ては完全に失敗した。……国民主義思想は下級の争いのオモチャにされてしまった。思慮深さ・責任感・公正さは臆病・卑屈と貶められ、隅に追いやられてしまったのである。」

アピールは更に次のように言う。

「国民主義的理念の純化によって、人々が責任をもって同意するような国民統一を形成するというに、無能な指導層は何も寄与しえなかった……」「眞に国民主義的で国家肯定的なすべての勢力の結集と再編への要望は、広汎な層をとらえている。新しい、分別ある、団結した指導部の下での巨大で意志強固な結集運動のみが、更なる破壊を阻止し、ドイツ国民の新たな上昇を導くことができる。この政治状況は、青年ドイツ運動の、今この時にふさわしい実践任務にむけての出撃を必要としている。」

以上から、反ヤング案運動に結集した勢力への対抗結集運動としてVN - Aktionが開始されたことが確認できようが、ではなぜ、対抗が、騎士団単独ではなくして結集運動という形になったのであろうか。

(2) なぜ結集運動か

第一に敵対する結集運動を圧倒せねばならぬ、という事情が挙げられよう。マーラウンは言う。⁷⁾

「ドイツを益するに必要な国民的フロントは、フーゲンベルク・ゼルテF. Seldte（鉄兜団々長）・ヒトラー等過激派の下に集う別種の国民主義的結集運動に比して、いかなる事情においてもその規模を下回ることは許されない、とは自明であった。」

第二に、40万人程のメンバーを擁する鉄兜団が単独では国民投票運動を展開できなかったことにすでに示されているように、騎士団においても、メンバー数10万を切り始めていたこの時期、既成政党を圧倒できない自らの支持基盤の狭さ、力量不足への深刻な認識が見られる。⁸⁾

「諸ブント内には今日なお、ひとつの規律あるブント的組織が政治権力を獲得しうる、との見解が存在する。この誤りは正されねばならない。今日ブントに組織されている人の数は、一般に受け止められているよりもかなり少ない。……ブントにとって危険なことは、それが国民の大多数から遊離してしまうことにある。」「ブントのみでは革命によっても改良Evo-lutionによっても、その目標を権力政治上達成することはできない。ブントには、その意志を様々な理由から受動的になっている大多数の人々の中に持ち込みうる方途を見つけ出すことが要請されている。」

このことは、団員向けの書物においても次のように率直に語られ、団員の意識変革が図られている。⁹⁾

「我々騎士団がこの時期なお、単独で事を構えるが如き硬直した姿勢を保持するならば、そ

れは誤りであろう。」「我々がもつ諸理念は、より一層広汎な基盤上に置かれなければならない。これに成功しない時、騎士団は、他の集団が我々の理念を受け入れ、それをその政治プログラム・新しい政治集団形成の基礎となす、ということを経験することになる。」したがって、騎士団側からすれば、支持基盤の回復・拡大の方途がさぐられようとしていた時に、対抗し圧倒すべき結集運動が立ち現われてきたということになる。

第三の理由として、そもそも騎士団の掲げる理念のうちに、結集運動化への方向性が内包されていると見ることができる。その「公民的共同体」思想における共同体概念の核は人々相互の「理念的絆」と「信頼」ということにあり、実利主義や金権主義に対する批判も、それが国民的統一を阻害するゆえになされるのであり、憎悪・狂信から「英雄主義」に転ずることを勧めるのも「終りなき内戦状況からの脱出」を求めてのことであった。¹⁰⁾ したがって騎士団の理念には、もともと対立や分裂を避け提携・連帯を促すという性格が内包されており、その意味では、結集化は思想展開上むしろ必要なことであった。更に騎士団が、思想的に近い立場の人々の総入団化ということへのこだわりを捨て、反政党主義の理念に固執しないのであれば、団外の人々との結集化は、比較的容易であったろう。

他方、この諸理念は、結集の際のイデオロギ的核になるから、いかなる勢力をいかなる意味で結集しようとしたのかを説明しよう。先に引用したVNR結成アピールを利用して簡単にまとめるならば、この結集運動は、金権主義フーゲンベルクの下に集う、「思慮深さ・責任感・公正さ」を「臆病・卑屈」と見做すような反英雄主義的な「過激派集団」を排し、「真に国民主義的で国家肯定的なすべての勢力の結集と再編」を志向するものであった。これらの内容を、以下いま少し掘り下げてみたい。なぜ、反ヤング案運動に結集した集団に対抗しなければならないのか。フーゲンベルクあるいは「過激派集団」のどこが騎士団の政治信条に抵触するのか。「真に国民主義的」であるとはいかなる意味内容をもち、「国家肯定的なすべての勢力」とは具体的にいかなる人々を想定しているのだろうか。

(3) フーゲンベルク批判—いかなる勢力の結集か①

なぜ、反ヤング案国民投票運動に結集した集団への対抗が必要か。

マーラウンは先ず、「この国民投票は、まるで30年4月1日をもって口蹄炎は止むものとする、と決議されることと殆ど変らない」との或る農民指導者の言葉を引用しつつ、反ヤング案運動そのものの有効性あるいは基本姿勢に、次のように疑問を呈する。11)

「ドイツ国民が戦争責任の汚名や莫大な賠償支払いに苦しんでいるのは……ただただ戦争に敗れたからなのである。ドイツ国民は、抵抗する力が弱いからこそ敵の厳命Diktatを背負わねばならないのである。しかしまた、それゆえに、現実的勝利を約束する解放行動は、ドイツ国民の力を強化するというところから始められねばならぬことが明らかとなる。したがって、恥辱と賦課からのドイツ国民の解放が議論されんとする場合には、国民の統一と強化が達成されうるような方途について語られねばならないのである。」

にもかかわらずフーゲンベルク等は、運動方法においても、「くだらない、そして尊大な自己熱狂のためにあらゆる理知・分別を排除せんとする、あの非現実的力自慢」に終始し、大戦中の「我々は敵を余すところなく屈服させるのだ！」と同質の「我が陣営にこそドイツはあり！他の者に価値はなし！」という傲慢な「全ドイツ派のテーゼ」を叫んだ。その結果、その「テーゼに一致しない者は『ろくでなしか売国奴』とされてしまった」のであった。¹²⁾

したがって、マーラウンに言わせれば、彼らは、「国民的ドイツnationale Deutschlandに新たな不和を持ち込ん」で「ドイツ国民の力を弱めた」だけであり、対外的にも、彼らのみが「戦争犯

罪の嘘と奴隷化に断固として反対する唯一すべての国民的ドイツ、と見做される」ような像が拡がってしまったのであった。それゆえ、「国民的抵抗派はフーゲンベルク行動に表現されたものより遥かに広い基盤をもつ、ということ迅速に表明することが無条件に必要」となったのであった。¹³⁾

このことは、前述の、結集という運動形態選択の必要性を理由づける第一の要因を補足説明することになろうが、反ヤング案運動批判についてはこの程度にとどめ、より包括的全般的なフーゲンベルク（・グループ）批判に目を転じてみたい。マーラウンにとって一体フーゲンベルクとはいかなる人物であるのか。このフーゲンベルク（・グループ）が体現するものの対極に、マーラウンの言う「真」の国民主義も指定されるものと思われる。

まず、フーゲンベルクの28年10月における国家人民党々首への就任は、次のように説明される。¹⁴⁾

「彼は、（映画・新聞・出版コンツェルンの盟主として）大衆に影響力を行使しうるあらゆる宣伝手段を所有している。それによって彼は、今日の政党主義の法に則り、必然的に指導者となったのである。……比喩的に言えば、彼はまさに株券の束によって指導者の地位を買い占めたのだ。」

要するに、フーゲンベルクは、金権勢力による政党支配、という騎士団の年来の主張を典型的に証明する人物であった。しかも、反ヤング案運動主導に示されるように、今や国民主義運動までもひとつの「商号Firma」となして、この「金満家は、かつての国家人民党同様この商号を購入しようとしている」のであった。¹⁵⁾

更にマーラウンにとっては、その国民主義運動に持ち込もうとしているフーゲンベルクの思想が問題であった。¹⁶⁾

「フーゲンベルクは次のように言い、あるいは言わせる、『非マルクス主義的でナショナルな国民層のフロントが、マルクス主義的で反ナショナルな国民層に対抗して形成されねばならない』と。しかし彼は、無産者に対する有産者のフロントをもくろんでいるのだ。……したがって今日の国民主義運動は、その指導的地位に階級闘争者を置いているがゆえに、階級闘争を克服することはできない。」

つまり、マーラウンにいわせれば、「大ブルジョワ層、大中所有層の法律顧問以外の何者でもない」フーゲンベルクが狙っているのは、あくまで「無産者に対する有産者のフロント」形成であって、それは確かに「非マルクス主義的」ではあるが、しかし、すべての無産者をその立場を問わず排するという点で、決して「ナショナル」ではないのであった。

これは、例えば彼我の社会民主党観をめぐって、次のように説明されている。¹⁷⁾

「（1918年）以後、社会民主党は、階級独裁をめざす者と自らを民主主義共和国の基盤上に置く者とは分かれ、階級支配を主張する者は独立社会民主党および共産党に結集した。……社会民主党の新たな国家肯定路線を承認し、正しい手段によってこれを強化・支援することが、分別あるブルジョワの戦術であったろう。」

にもかかわらず、そのような展開はドイツ国民には授けられなかった、とマーラウンは言う。

「社会民主党に創られた政党共和国の金権主義的性格が、あらゆる期待に反して、再びフーゲンベルク周辺の旧ブルジョワ指導層を上昇させたのである。彼らは18年の崩壊から何も学んでおらず、その憎悪と片意地な敵対感情が理性より強固であることをすぐさま示した。……彼らは国民主義運動を、現国家の否定と社会民主党への憎悪において結集したのである。」「したがって、真のマルクス主義者は、フーゲンベルクに感謝しなければならない。なぜなら、彼は、社会主義的ドイツ人数百万を国家への信奉に唯一引き戻しうる民族共同体

運動を妨げているのであるから。」

要するに、共にドイツ資本主義の再生を求めつつも、フーゲンベルクは、有産者支配の立場から社会民主主義勢力を全否定し、マールアウンは、同勢力内・下の、「国家肯定路線」上の「国家への信奉」心をもつ、つまりはナショナリズムを受容する部分・傾向を、民族共同体形成の観点から育成・強化、統合の対象になるとするのである。マールアウンは言う。¹⁸⁾

「……青年ドイツ運動は、黒白赤ならびに黒赤金陣営内の誠実な人々を架橋する可能性を提供してきた。今日のドイツに在るが如き二分された国民相互の憎悪は耐えられないものであるがゆえ、そのような橋渡しは必須のものである。全世界がドイツ国民を搾取・抑圧せんとする時に、感情的対立を緊要なる国民全体の統一の上に置くことなど、民族的裏切り行為であろう。」「我々は、ドイツ民族の統一を欲するがゆえにフロントの狭間に立ち、かつそれを望むのである。」

この基本姿勢からすれば、「真のドイツ再生にとって、社会主義大衆数百万の国家信奉表明が基本的前提たることを否定する者はいない」はずであった。

ここに、VN-Aktionの呼びかけ対象の中に、右翼陣営の諸政党・ブントに属する人々、とりわけ国家人民党内のフーゲンベルク路線に反発する被傭者層とともに、国旗団員を含めた「黒赤金陣営内のナショナルな勢力」、すなわち「共和主義国家は肯定するがインターナショナルな、不戦主義的pazifistischな、反キリスト教的な傾向は拒絶する人々」が上ってくるのである。¹⁹⁾ 現実には、呼びかけへの反響は期待した程の拡がりはず、VNRは、騎士団と非マルクス主義プロテスタント系労働組合のメンバー・支持者を中心とする小規模の結集体にとどまる。その後民主党との合併という急展開の中で、あらためて、例えば国旗団員に向けての支持要請等が生ずるが、これらの点は後述することとし、ここでは、マールアウンのフーゲンベルク（・グループ）批判を更に続けて紹介していきたい。

(4) 「過激派」批判—いかなる勢力の結集か②

先に引用した社会民主党をめぐる議論においては、「フーゲンベルク周辺の旧ブルジョワ指導層」は「18年の崩壊から何も学んでおら」ないとあったが、マールアウンに言わせれば、フーゲンベルクの狙う有産者支配とは、詰まるところ、戦前の「教養と財産の支配」への復帰を意味するものであった。²⁰⁾ それはまた、「臣民制Untertanentum」への復帰としても表現される。そしてそのような復古を許さぬところに、volksnationalすなわち真正国民主義ないし人民主義的国民主義の新しさもあった。マールアウンは言う。²¹⁾

「旧い意味でのnationalは、なお一定程度、ある種の臣民制信奉を含んでいる。それは紀律へのアピールで飾りたてられている。その綱領は指導者である。忠誠は個人に向けられる。このような感情世界の下、フーゲンベルクは……彼への忠誠を要求する。（一方）volksnationalはそのような見解ではない。Volkという言葉の強調に既に示されている如く、この新しい国民主義的信奉においては、すべての者の国民的共同体に対する高次の承認が存在する。国家・社会においてまさしくvolksnationalたらんとする場合には、理念への忠誠が要求されるようにならなければならない。その理念とは全体へのすべての者の共同奉仕である。指導者は必要である。しかし、理念あるがゆえに、忠誠・信従が彼に向けられるのである。この見解の下では、臣民制はとどめを刺されるのである。」

さて、「臣民制」ないし「教養と財産の支配」への復帰という意図の下、フーゲンベルク等は、「長期にわたってその支持者に、1914年の状態への復古要求という形の阿片をたらしこんできた」。ところが、この麻薬は今や効力を失い、そこで新たに「いわゆる独裁を騒ぎ立てること

で、責任感に目覚めた市民層を麻痺させんとしている」とマーラウンは言う。²²⁾

「全ドイツ派の政治集団は、ドイツ国民の組織化は独裁によってのみもたらされうる、との見解を主張している。この見解は、国民主義運動の急進翼を結びつけている。イタリア・ファシズムの例が至る所でモデルとして評価されている。」

ここに、反ヤング案運動に集結した諸組織の「過激派集団」たる素地が固められることになる。マーラウンは、次のように、反ヤング案運動へのヒトラーの参加姿勢を推測しつつ、フーゲンベルク等との結びつきが持つ諸性格をかなりの確に論じている。²³⁾

「ヒトラーは、フーゲンベルクが指導するこのフロントに確信から参加しているのではなく、有産者のフロントに自らの運動を委ねるつもりなど全くなかった。彼は、純粋に戦術的考慮から同行したのだ。社会民主主義への共通の憎悪が連結環であった。あらゆるドイツ人による国民的統一への拒否、そして不寛容という共通性が、この不自然な結合に裂け目が現われるのを隠していた。」

そしてヒトラーや、「本来、よりマシな使命をもつはずであろう」のに「教養と財産の世界に屈してしまった」鉄兜団々長ゼルテを含め、「一定のカテゴリーの人々がフーゲンベルク周辺にある」、として更に続ける。²⁴⁾

「彼らは、イタリア・ファシズムの友としての自己認識にすぐれる。多分、ムソリーニは偉大な人物の一人であり、20世紀の民族闘争において大きな意義を有する者だろう。しかし、フーゲンベルク周辺下で統一されているファシズム賛美とは、国民の意志への拒絶、暴力への熱愛ということなのである。」「彼らは皆、独裁をやかましく要求する。皆それぞれが別々の独裁を狙っている。……彼らのフロントは、建設を始める時には瓦解しよう。それゆえ彼らは、自陣営の統一が脅かされると常に叫ぶのである、『対マルクス主義闘争を！』と。」

マーラウンは、「ファシズムは新しいフロントをもたらしうるか」と自問する。その際、彼におけるファシズムの含意は、独裁とそのための手段としての暴力的方法の肯定、にあるが、それらは、「目下の内政状況において、また、ドイツ国民の心性において」否定される。これを彼は、労働者の支持如何から説明する。²⁵⁾

「ベルリンへのファシスト的進軍は、ファシズムがドイツ労働者大衆に支持された時初めて成功しよう。しかし、労働者層は決してそれを支持しないだろう。労働者の闘争は、数十年來、官憲国家の絶対的権力に向けられてきたのであった。労働者の圧倒的部分は、自らの国家への編入を、自治の拡大と民主政の中に見ていたはずである。したがって彼らは、その歴史の展開上、始めから反独裁の見地に立つ。更に彼らはこの十年、共産党からのプロレタリア独裁への呼びかけに、鋭く対立してきているのである。」

そして、「ドイツ人はイタリア人ではない」と続ける。²⁶⁾

「クーデターや暴力的方法への抵抗は、ドイツにおいてはイタリアに比べて遥かに強い。ドイツ労働者層は、ファシストのローマ進軍時のイタリア労働者層とは全く別の闘争勢力である。……ドイツの大資本の少なくとも大部分は、現今の見地・布陣からして、国家への武装反抗を支持しないだろう。暴力的措置によって個々の状況を改善せん、との希望はドイツにおいては、国民の広汎な層が、今日の窮状の大部分は敗戦に帰す、ということを理解しているがゆえ、それ程強くはない。したがって、革命のファシスト的方途ないしは武装蜂起の方途は、ドイツの現状下では実行しえない。(Revolutionではなく)改良Evolutionという方途が扱ばれねばならぬことは明らかである。」

ここに、前述の、反金権主義的意味での「人民」主義的ナショナリズムと、反マルクス主義的

階級闘争の意味での国民(融和)主義的ナショナリズム、および反国際主義の意味での国家主義的ナショナリズムを合わせ志向する人々、すなわち、「国民主義的で国家肯定的なすべての勢力」、は同時にまた、独裁を排し暴力的変革を全面否定する、反「過激派集団」でもあることになったのである。そしてそれが、VN - Aktionのイデオロギー的核ということになる。ちなみに、この改良主義志向の選択は、後述するように、VN - Aktionを組織化したVNRに政党機能を与える際の、絶対説得論理として適用されることになる。つまりここでは、自立的政治闘争団体たる騎士団が攻撃して止まない政党主義システムは、それを一気に解体しようとするれば独裁的権力の命を必要とし、一方そのような独裁への政治展開を騎士団が拒絶する以上、手段としての議会主義を受容し、内部から段階的にシステムを変革していくしかない、と主張されるのである。

(5) 再編の主導者—騎士団の存在意義証明

以上、比較的詳細にマーラウンの意図するVN - Aktionの意味内容をフーゲンベルク(・グループ)批判を通して紹介してきたが、最後に、結局VNRという小規模組織に結実することになるこの反フーゲンベルク運動としてのVN - Aktionの、あるいは国民主義運動全体の再編に際しての主導者像について、彼の語るところを明らかにしたい。言うまでもなく、それは騎士団ということになるが、場合によってはそれは、改革意志のある既成政党でも不可能ではない。なぜ、既成政党主導の再編を不可とし、ブントを了とするのか。

これは一方では、既に述べた金権勢力の政党支配ということを確認する作業となろう。と同時にこれは、当時の騎士団が置かれていた立場を確認する作業ともなる。やはり前述したことであるが、マーラウンは、結集の必要を語った際ブントの非力を認め、詰まるところ騎士団が政治的効力を保持していないことを表明せざるをえなかった。したがって今や、自立的政治闘争団体の存在意義をさし示すことがその存続上絶対に必要となろう。それが、結集化および結集運動体のイニシアティヴを握るという形であられるのである。本章冒頭に掲げた三要件のうちの二つ、すなわち、騎士団の理念に忠実な、共和国の政治状況に対応した実践政治は、VN - Aktionという結集運動によって充たされようが、それを騎士団が唱導・主導することによって初めて、いまひとつの課題たる自立性の確保(ないし自負の充足およびイニシアティヴの獲得)も同時解決されることになる。

さて、マーラウンは先ず、共和国外相にしてドイツ人民党々首であったシュトレゼマンG. Stresemannが29年10月に病死したことの意味を語る。²⁷⁾

「シュトレゼマンの死は、国民主義運動の展開にとってひとつの決定的意味をもつ。彼は、ドイツの政党社会において一角の人物であった。であるがゆえに、彼は、ブルジョワ諸政党の政策とくに外交政策への決定権を保持していた金権勢力とは異った見地を採りえたのである。……シュトレゼマンにたいし唯一投げかけ可能な非難は、彼が金権勢力に必ずしも十分に立ち向かわなかったということであろう。彼が健康であったなら、疑いなく断固として戦ったであろう。」

この意味で「シュトレゼマンはフーゲンベルクにたいする唯一の対極」であった。しかし、もはや彼は存在しない。

「彼の死後、フーゲンベルクは一層あからさまに以前からもくろんでいた『少数右翼』、すなわち有産ブルジョワ・ブロックの形成を狙っている。……今日の国民的ドイツが陥っている全体状況をうまく特徴づけようとするれば、実際、全面解体としてしか描きえない。再編の中心となりうるような強力な立場は、フーゲンベルク周辺のラディカリズムの立場を別にすれば、もはや存在しない。したがって、国民的ドイツは、その全勢力がこの過激派に引き渡

され費やされてしまうのか、それとも、何らかの形でポジティブな国民的要素を結集しうる新しい貯水池を形成するのか、これが明らかにされなければならない。それはしかし、盲目的信頼に依るような人物を前面に立てる、という方法では無理である。そのような人物はもはや獲得し難い。共同行動の下ひとつの敬意を表されるにたる統一をなすために、もっとも価値多き国民主義勢力を結集しうる方途が見つけ出されねばならないであろう。」

このように、シュトレゼマンの死は二重の意味をもった。彼は、政党人として「一角の人物」であったがゆえに金権勢力と対抗できたが、それゆえにまた、自らに匹敵する後継者をもたなかった。したがって彼の死は、フーゲンベルク・グループの台頭・活性化を招くと同時に、それに対抗しようとする側に指導的人物を欠くという事態をもたらしたのである。ここにVN-Aktionは、まさに人々ないし諸組織の「共同行動」による結集運動として位置づけられ、その共同・結集の核に、volksnationalを特徴づける、対個人忠誠を排した「理念への忠誠」が置かれることになるのである。

そこでマーラウンは、この「共同行動」を促すために29年6月から、「燈火信号Fanal」と呼ぶデモンストレーションをドルトムント・ドレスデン・ダンツィヒ等で開始した、と言う。²⁸⁾

「青年ドイツ運動は、力強いデモンストレーションを挙げてその支持者大衆の一団の存在を示した。その目的は、この方法で、ますます分裂し希望を喪失したポジティブな国民主義勢力に、再編のためにいかなる勢力がまだ顕在であるのかを示すことにあった。」「『ドルトムントの燈火 信号』は、全真正国民運動にとっての指針・プログラムとなるはずの国家理念の創造的形成という目的のために、黒白赤ならびに黒赤金陣営の側からの信頼できる人々を会合させよう、という若い世代の要求であった。」

このようにしてVN-Aktionは、騎士団の先導によって具体的に行動を開始し、前掲の29年11月のVNR結成アピールへと展開していくのであるが、このような反フーゲンベルク運動の構築ないし国民主義運動の再編に際し、既成政党はどう位置づけられるのであろうか。「共同行動」ないし「国家理念の創造的形成」に際し、既成政党には主導的役割は認められないのであろうか。

マーラウンの結論は以下の如くである。²⁹⁾

「既成諸政党、あるいは一政党の改革を通して国民的ドイツに望まれている新しいフロントを創造する、という可能性は存在しないだろう。……強調されるべきは、既成政党にVolksnationalな改革が不可能である理由はその組織に存するということだ。組織の財政的依存があらゆる自治を不可能にする。」

つまり、ブルジョワ諸政党においては、フーゲンベルクの国家人民党に限らず、党財政を支える資金提供という点で、「大資本家集団が宣伝装置と党官僚機構上に決定的影響力を保持」し、その結果「党内に健全なる自治は進展」せず、しかも「大資本家集団は純粋に経済的のものを考えるから……党機構内にいかなる精神的運動も展開しない」と言うのである。³⁰⁾

そして、このような「精神的空転」を根底においてある程度緩和するはずの旧来の伝統的理念、すなわち「保守主義や自由主義」は、マーラウンによれば、「今日もはや国民大衆、とくに若い世代を動かさえない理念である」。更には、旧ブルジョワ政党は、本来、「優勢なプロレタリア組織に対抗するブルジョワ諸勢力の結集のための組織」として革命期に登場したのであり、確かに現在、中央党を含め国家人民党・人民党・民主党いずれの政党も労働者翼を有してはいるが、しかし「そのひとつとして、そこに真の民族共同体を語りうるほどには、この労働者翼をブルジョワ・農民層と結合してはいない」のであった。したがって、マーラウンに言わせれば、「新しいワインを古い皮袋に満たすべきではない」。³¹⁾

また、政党の主導的役割への否定は、「ここ数年に新造されたり成長した諸政党」にも該当す

る。マーラウンによれば、例えば経済党とキリスト教国民主義農民党は、「個別身分、つまり中間層と農民層に自らを固定している」がゆえに、「そこに全身分が結集することは不可能であり、したがって、共同体的フロントの貯水池としては除外される」。ナチ党については、次のように言及されている。³²⁾

「同党をして……貯水池提供を全く不可能にしているのは、その方法にある。イタリア・ファシズムの下手な模倣がそれである。この党は、その不寛容と暴力崇拜によって、国民主義運動の多数の人々を自らに迎える状態にはない。その戦術は国民分裂を助長するだけで、統一・結集にむけて作用しない。したがって同党は、ムカッ腹を立てた急進分子を糾合し、現状に完全に絶望した者の票をあちこちで掻き集めるという課題に甘んじなければならない。」

政党に主導的役割が担えない以上、それは政治闘争団体の任務ということになる。但し、それは政治闘争団体一般でも自立的政治闘争団体一般でもない。「規律あるブント組織」に限られるとマーラウンは言う。³³⁾

「金権主義の諸装置による世論支配への最強の反対者は、政治的な規律あるブント組織である。したがって、国民の権利確保のための来たるべき大決定闘争では、有用なるブント組織を反金権主義的姿勢の確かな経済政策組織と結合させねばならないであろう。……我々は、ひとつの規律あるブント組織の貢献が反金権主義的意味での新しいフロント形成の不可欠の前提となることを確信する。そのような組織抜きでは、いかなる再編もその運命を既成政党と共にしなければならぬ。いかなるブント組織にこの課題が与えられるべきか、を確定するのは難しいことではない。それは青年ドイツ運動であるに違いない。」

では、他の団体はいかなる点で「規律あるブント組織」として認められないのであろうか。マーラウンの評価を簡単に紹介するならば、最大の自立的政治闘争団体たる鉄兜団は、「現指導部の下、完全にフーゲンベルク・グループの手中に帰していると見做されねばなら」ず、「いわゆる右翼陣営内の反動・金権勢力の同盟者である」。そこでは「指導層は……完全に古いフロントにつなぎとめられて」おり、「『社会民主主義あるいはマルクス主義の根絶』という例のスローガンの下、旧ブルジョワ国家の復興を助長せんと努めている」のであった。他方、比較的規模の小さい国民主義的ブント、例えば人狼団Wehrwolfやオーバーラント団Oberlandは「まだ思想闘争に入る環境にはなく、彼らが精神的にどう展開していくのか不明」である。感情レベルにとどまる新フロント形成志向と、他方でのラディカリズム志向との間で彼らは揺れ動き、「消耗し、あるいは少なくとも活性化しえないでいる」とされた。共和国派の国旗団に関しては、マーラウンは、鉄兜団同様その一般団員の新しいフロントへの参加を期待しているが、しかし、「社会民主主義者が決定的に権力を握っている」状況下では、国旗団が「その政党結合にかまわずに、この時代の大精神闘争に出動する用意があるのかどうか」不明とし、ここでも主導的役割付与を認めないのである。³⁴⁾

一方、マーラウンは、騎士団の運動を「いたる所で認められている如く、規律あるもの」と見做し、その組織形成における金権勢力からの自立を自賛する。³⁵⁾

「青年ドイツ運動においては、この10年間に、旧ブルジョワ政党に影響力を行使した大中小所有層の諸ファクターから独立した、文句のつけようのない統一的政治機構が形成された、という事実はますます大きな意義をもとう。」

そして、主導的役割を果たすことへの騎士団の適格性を次のように主張するのである。³⁶⁾

「騎士団のオルデンOrden的紐帯と規律は、新しい展開の民族共同体的性格を確保するに好適である。(同じく) 騎士団のそれは、有産・無産階級への分裂というものが、新しいフロン

ト内に持ち込まれるのを阻止するに好適である。(更に) 騎士団のそれは、階級・カースト・金権が新しいフロント内で、『すべての民族共同体的責任と義務』に対し勝利をおさめるのを阻止するに好適である。これは、政党組織における旧来の『金権的管理Geld-Verwaltung』がメンバーの『自治』に代替されることを意味している。」

以上から、「国民主義運動の再編を必要とするこの時、騎士団に、新しいフロント形成のためのナショナルな道具たる任務が与えられる」のであった。

マーラウンに言わせれば、³⁷⁾ 「真に国民主義的なドイツへの旅立ちは、何百万のドイツの人々にとって、まさにひとつのロマン」であった。しかし、「誰がこのロマンに組織力・有機的意志・政治的造形を与えるのか」。この問いに対する彼の検討は、シュトレゼマンの人物像描写に始まり、政党批判を経て、ここに青年ドイツ騎士団という答えを見いだしたわけである。

(未完)

註

- 1) 拙稿「赤色前線兵士同盟と『政治闘争団体』」『西洋史学報』17(1990)
- 2) 拙稿「青年ドイツ騎士団団長A・マーラウンの政治思想」『山口大学教育学部研究論叢』39-1(1990)
- 3) 本来ならここで研究史整理が必要であろうが、類例の視角からする政治闘争団体研究ないし騎士団・ナチズム運動研究の数は乏しい。他方、個々の論点に関してはとりあげるべき研究の数は少なくない。いづれにせよ、論の展開上この場にはなじまないの、先行研究に関しては行論に即して言及していきたい。

なお、騎士団やSAはもとより、国旗団・赤色前線兵士同盟をも含めた諸団体(およびその先駆的諸組織)の存在が招来・助長した軍事的バイアスのかかった政治文化、が共和国政治上に有した意義については、別稿で論ずることにしたい。ナチズム運動の興隆におけるSA存在の意味に関し、本稿では、組織的的局面からする統合運動性に注目しているが、他方で、この政治文化に適合する運動の展開をナチズムに保証したのもSAであった。また上述したように、マーラウンは前線兵士体験から「公民的共同体」論を導いたが、これは、ワイマル社会が、第一次大戦での兵士体験(にもとづく思想や行動)に高度の政治的価値を認めていたことの、ひとつの表出であった。筆者が政治闘争団体の指標として挙げた③④も、このような政治的土壌・文化に由来し、かつそれを促進するものであった。いまだ組織・団体史の域にとどまってはいるが、筆者は以上のような観点から、政治闘争団体研究に有効性を見出している。

- 4) A. Mahraun, Der Aufbruch, Berlin 1929, S. 5
- 5) Ebd., S. 34
- 6) Ebd., S. 54f
- 7) Ebd., S. 33
- 8) Ebd., S. 42, 44
- 9) A. Mahraun, Parole 1929, Berlin 1929, S. 48, 51
- 10) 拙稿「青年ドイツ騎士団」6, 14頁
- 11) Der Aufbruch, S. 6f.
- 12) Ebd., S. 5f.
- 13) Ebd., S. 7
- 14) Ebd., S. 10

- 15) Ebd., S. 22
- 16) Ebd., S. 20f.
- 17) Ebd., S. 18ff.
- 18) Parole 1929, S. 7f.
- 19) Der Aufbruch, S. 30
- 20) Ebd., S. 11
- 21) Ebd., S. 69f. volksnationalはきわめて訳しにくい用語である。が、ここでの引用文に示されるように、マーラウンは単なる、あるいは偽物のnationalではない、という意味で、そしておそらくdeutschnationalに対抗する意味で使用しており、筆者はそれを、とりあえず「真正国民（主義）」という言葉で表わしてみた。VN-Aktion、VNRを真正国民行動、真正国民全国連合と訳した所以である。但し、筆者自身も釈然としないため、もう一步踏み込んでみた訳語が「人民主義的国民主義」である。これは、マーラウンが徹底して金権主義を攻撃していることを重視し、彼のいうVolkを金権勢力以外の人々の集団と理解するからである。また、騎士団の運動のポピュリズム的色彩も考慮に入れてみた。したがって、我が国において「人民」という語がそれなりにもつ意味を意識しつつも、筆者は旧稿においても、マーラウンのVolksstaatを「人民国家」と訳している。なお、K・ゾントハイマーの研究書（『ヴァイマル共和国の政治思想』ミネルヴァ書房、1976年〈原著は1968年〉）に政党名におけるnationalとVolkの使用に関する言及があり、そこでは両用語の結合を示すものとしてVNRが挙げられている(291頁註30)。その際、河島幸夫・脇圭平氏の訳ではVNRは「民族国民帝国連盟」とされている。また、関口宏道氏は、B. B. フライの研究書（『ヴァイマル共和国における自由民主主義者の群像』太陽出版、1987年〈原著は1985年〉）の翻訳において、VNRに「民族的国家主義者全国連合」という語をあてられている(252頁以下)。
- 22) Parole 1929, S. 50, Der Aufbruch, S. 40
- 23) Ebd., S. 15f.
- 24) Ebd.
- 25) Ebd., S. 40f.
- 26) Ebd., S. 42
- 27) Ebd., S. 31ff.
- 28) Ebd., S. 33, Parole 1929, S. 51
- 29) Der Aufbruch, S. 40
- 30) Ebd., S. 39
- 31) Ebd., S. 36f.
- 32) Ebd., S. 39f.
- 33) Ebd., S. 45
- 34) Ebd., S. 27, Parole 1929, S. 44ff.
- 35) Der Aufbruch, S. 52
- 36) Ebd., S. 53f.
- 37) Ebd., S. 31